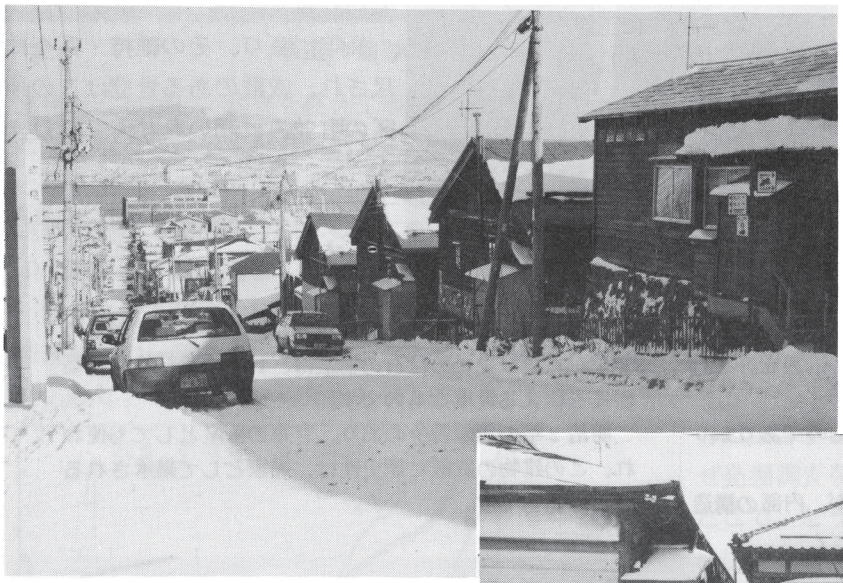
会報 28号

れきふーう

函館の歴史的風土を守る会会報
№28号　S 63.1.22
発行所　函館の歴史的風土を守る会
事務局　函館市五稜郭町43－9
五稜郭タワー株式会社内
電話 (0138)51－4785
印刷所　双葉印刷　☎53－7730番

歴風文化賞の発表と贈呈式が第10回函館の町並みを語る新春チャリティ・パーティで行われました。

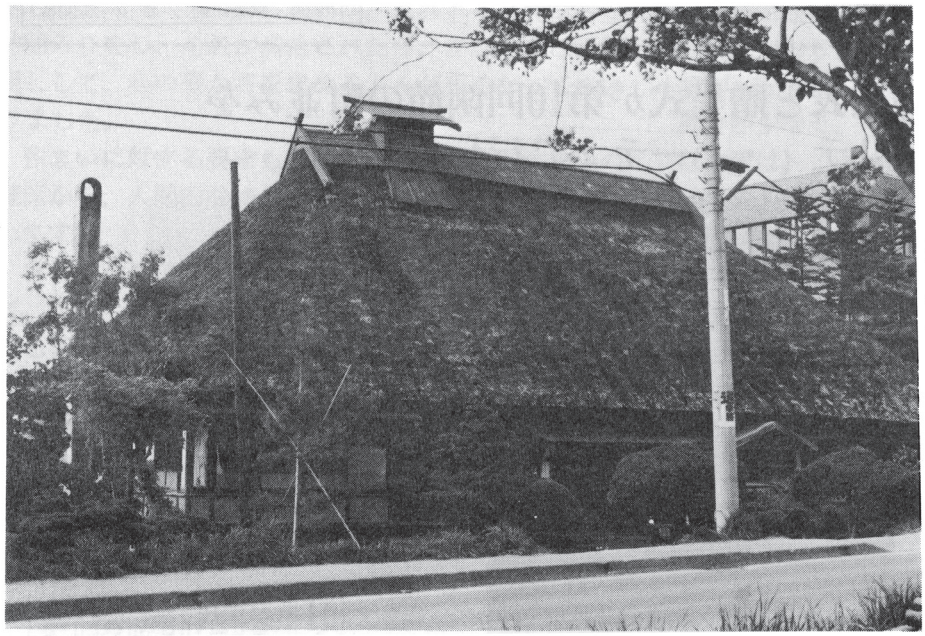
函館の原風景として「町家と路地のある風景」



宣　言　文

路地は都市化する市街地の中で今も人のぬくもりを漂わす空間です。軒先きには四季の草花が咲き、人々の交流が濃密なヒューマンスケールの社会をつくってきました。路地には函館の町家の特徴ある住宅が軒を連らねています。函館山山麓に在る多くの名建築は、これら路地と町家と一体をなし個性豊かな美しい景観をつくっています。町家と路地のある風景をこそ、ふるさとの懐かしい原風景として、ここに宣言します。

第5回歴風文化賞　保存建築物2件



← 永田邸

函館市赤川町200
永田　勝男 殿

貴邸は、江戸後期に建てられた茅葺きの木造建築であり、本道の民家建築として貴重な歴史的建物であります。

長年に亘り、その維持・保全に尽され、威厳のある貴邸はこの地区の町並みに潤いを与えております。

その努力に謹んで感謝の意を表します。

永田家は、南部の出身で、江戸時代より現在地で広い水田を耕作する地主であり、早くから名字帯刃を許された旧家であります。

現在の建物は江戸後期の木造茅葺きのものであり150年近くなります。

屋根は60年前に葺き替えたものですが、内部の構造は昔のまま、梁は太く、反りがあり、柱は重量感があります。くさび止めの仕口の構造は、日本の伝統的な建築様式を伝える貴重なものです。

明治2年の箱館戦争のおり、官軍の陣屋としても使われ、この建物の威厳と歴史性は、民家として継承される重要な建物です。

近江邸 →

函館市赤川町372
近江新三郎 殿

貴邸は、明治17年茅葺きの木造建築として建てられました。茅葺きの民家建築の美しさを残す、優れた建物であります。

長年に亘り、その維持・保全に尽され、この地区の町並みに潤いを与えております。

その努力に謹んで感謝の意を表します。

近江家は、滋賀県近江の出身で、永田家と同様、亀田（赤川）の旧家であります。永田邸が威風堂々とした、「剛」の感性に対して、近江邸は壁面と屋根面との調和、屋根の傾きの美しさは「柔」の感性で我々にアプローチしてくれます。

前庭もよく手入れされており、附属する建物も残っており、当時の民家のブロックプラン（配置計画）を知るうえでも貴重な建物です。

材料・労力（共同作業）ともに多くを費やした建物として、歴史的にも重要な建物です。

再生保存建築物

← 手塚邸

函館市元町29－15
手　塚　徳　治　殿

昭和10年に建てられた貴邸は、函館の特徴的な建築様式である。上下和洋折衷の形で改築されました。これが、歴史的な町並み保存の推進に与えた影響は大きく、中でも貴殿の力で「所有者」「技術者」「行政」の三者を一体に実を挙げた努力には、深く敬意を表します。

昭和１０年に函館の特徴的な建築様式である上下和洋折衷で建てられた住宅建築であります。

今回、吉田氏と協力し、三年ほど使用していなかったこの建物を建設当時に復元しようと思いたち、様式や構造を建築の専門家にアドバイスを受け改修しました。

上階の軒先や出窓の持送りや胴蛇腹などの洋風と、下階の和風格子は周辺の建物とよく調和しており、西部の散策道路の一面を構成しております。

今後の修景方向をさぐる、大変よい実例であります。

実行委員長あいさつ

実行委員長　奥　山　三　雄

第10回函館の町並みを語る新春チャリティーパーティーの実行委員長と云う大役に指名されまして、大変光栄に思います。

私は、この会の副会長浜島先生に学び、大好きな函館を、少しでも良い街にしたい気持から、18年前に独立し、建設業を営んでおります。

皆様既に御承知のごとく、今年は、函館にとって歴史に残る大きな行事が予定されております。３月13日のトンネル営業、青函博の開催、それに伴なふ青函連絡船の廃止、そして、町並み景観保存に関する条例の施行、この条例は、３月議会において検討される予定になっております。

この条例が施行された場合、歴風会としても、より具体的な行動に出る事が可能になる事と思います。

私のように、建設業を営むものにとっても、関心を持ち、早々に勉強し、対応したいと思います。

いま全国的に町並み保存に関する問題が執り上げられ、その資料も沢山出されております。昨年、北海道建築士会でも、北海道開拓と建築に関する写真集と年表を出版致しました。今後、函館歴風会が、各種団体、行政機関と連絡をとりながら、勉強をし、益々発展されることを期待します。

今回は、歴風文化賞として、保存の部２件、再生の２件、団体の部１件、原風景１件を決定しましたが、今後もこの条例による保存、再生、がどんどん行なわれ、歴風文化賞が沢山出ます事を祈念しまして、御挨拶といたします。（建築士会々員）

再生保存建築物

←南北海道
電子計算センター

函館市末広町18－15
沼崎弥太郎 殿

昭和元年、西部の繁栄期を象徴する銀行建築として建てられました。

今日の情報化社会の最先端である貴社が、今回外観を保存し再生する努力をされました。
町並み保存、西部への活性化に与えた影響は大であり、その尽力に深く敬意を表します。

昨年、広く報道されましたこの建物は、昭和元年関根要太郎氏の設計で第百十三銀行として建てられました。その後、北海道銀行、昭和十九年北海道拓殖銀行函館支店、その後拓銀末広支店として市民に親しまれてきました。末広町支店の移転後、取り壊しの話しもでていましたが、今回南北海道電子計算センターの英断で外観を保存し、再利用する決意でよみがえらせてくれました。

今日の情報化社会の最先端の御社が、町並み保存、西部への活性化に与えた影響は大であります。

第百十三国立銀行

村　井　雄二郎

"地場産業の振興"とは中央集権に対する反ばつと反省をこめて良く聞かれるが、函館には北海道初の地場銀行があった。明治12年（１８７９）、函館の杉浦嘉七、田中正右衛門らによって資本金15万円で函館市会所町（現元町）に設立されたのがこの第百十三国立銀行で、その後、道内各地に支店を持つ本店銀行となった。「国立銀行」といっても私立銀行で、これは明治初期にアメリカのナショナル・バンクをそのまま日本語にしたものであった。

当時、全国各地に計153の「国立銀行」が設立され函館には外に第百四十九国立銀行もできたが、さしたる業績もないまま数年で終わっている。

しかし第百十三国立銀行は資本金十五万円、紙幣発行額十二万円で、函館経済を基盤として活躍した。

明治29年３月、国立銀行処分の法令により同行は普通銀行に転換、「百十三銀行」と改め、資本金を五十万円とした。第一次世界大戦中に、東京・小樽・旭川等に支店を開設、営業を拡大したが、大戦後の不況により、預金の伸びが停滞し、ついに昭和３年３月、㈧北海道銀行と合併し、百十三銀行は消滅した。

昭和16年、この㈧北海道銀行は北海道拓殖銀行と合併した。尚、現在の北海道銀行は㈧北海道銀行とはまったくの別会社である。

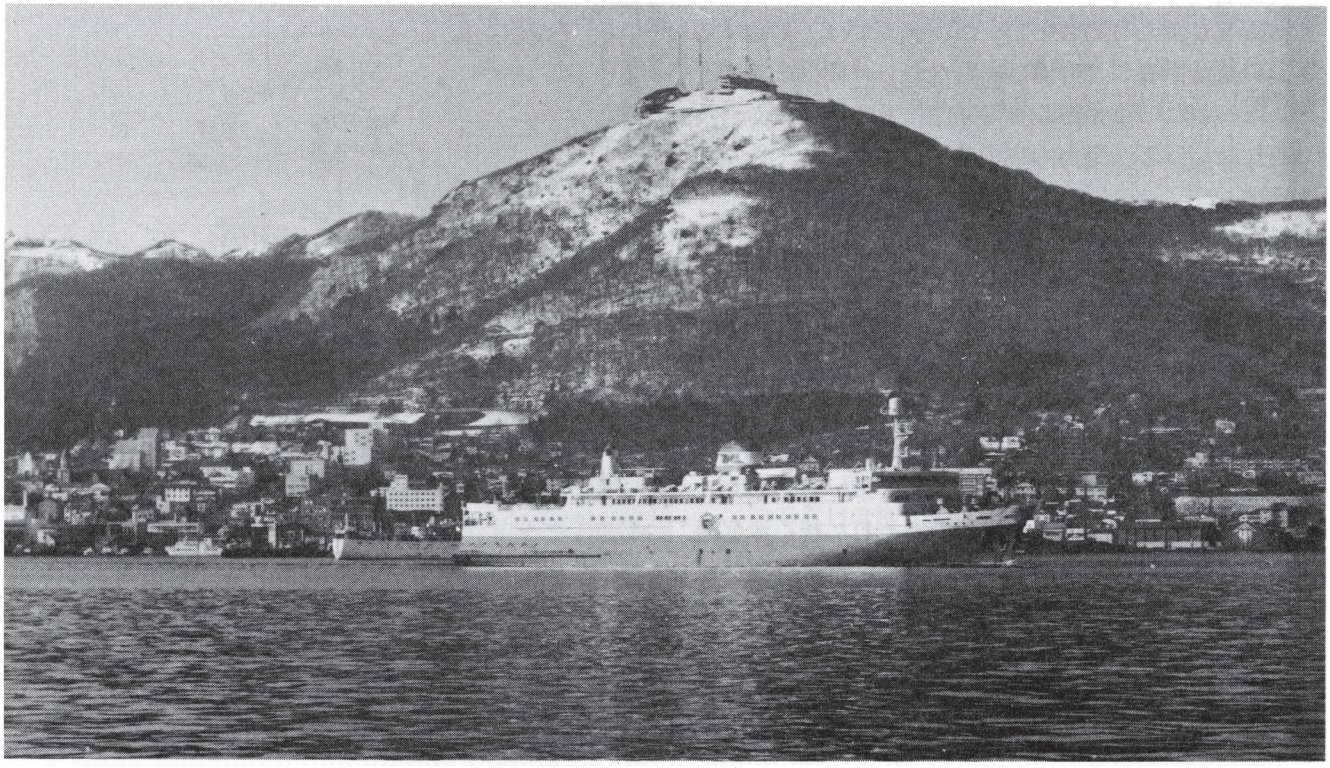
現在、計算センターが使っている建物（函館市末広町18－15）は大正15年11月、百十三銀行が函館本店として建設したもの。当時の建築工事概要を見ると、総建坪１６４.８１坪、本工事木田組、一年三カ月の日程と従業人員約１６,５００人とある。

同行は結果的に拓殖銀行に吸収されたので、拓銀末広町支店として使われていたものである。（貨幣研究家）

歴史的風土の形成に寄与する団体として「青函連絡船を守る会」

青函連絡船を守る会　殿

青函連絡船は明治・大正・昭和を通し北海道開拓と近代化の歴史を象徴する勇姿です。私共市民にとって連絡船は函館の原風景として親まれ、まさに動く町並みとし貴重な文化財となっています。この連絡船存続のため、いく多の苦節と苦闘を重さねた活発な市民運動が地域社会に勇気と希望をもたらした功績は大きくここに謹んで敬意を表します。



受賞者あいさつ

青函連絡船を守る会 事務局長　奥　平　忠　志

この度私達「連絡船を守る会」が歴風会から表彰されることになり、会員一同喜びと戸惑いを感じている。

会の発足は１９８２年1月３１日であるから、丁度今年で満６周年を迎えることになる。残念ながら昨年１１月に４者協議会（北海道・函館市・青森県・青森市）は一致した見解を見出せないまま、ほぼ連絡船の存続を諦める結論を出して締めくくった。

会は発足当初から連絡船の地域経済への貢献度の高いこと、８０年の永きにわたって函館の町並みの一部となって函館の歴史景観を形成してきたこと、苦しい時も悲しい時も市民の精神的支柱になってきたことなどから、連絡船の廃止は函館にとってかけがえのない財産を失なうことになると主張してきた。

確かに青函トンネルの開通は、道民の永い間の夢であった「本州との陸続き」を可能にし、新しい青函時代への架け橋となることは否定しないし、私達も素直に喜こんでいる。しかし、まるで内海のように静かな時もあれば、猛吹雪逆巻く波これぞ地獄かと思う程荒れる時もある津軽の海、喜怒哀楽をはっきり表す様は人間の感情と同じで、これが私達にロマンをあたえてくれた。連絡船がなくなれば、こうしたロマンを私達はトンネルでは味わうことができなくなる。

３月１３日で公式上の連絡船は消えるが、会の中で育ってきた若い人達の夢は消えず、青函博期間中の連絡船利用客のラッシュが必ずや存続につながるとの信念から、今また新しい運動を展開しようとしている。こうした若者達へどうか限りない支援を贈っていただくようお願いします。　（教育大教授）

津軽海峡線埋蔵文化財

運営委員　高　瀬　則　彦

昨年の11月９日から３日間、全道高等学校郷土研究大会が函館で開催され、私が勤務する函館北高校歴史地理研究部の発表テーマは「津軽海峡線と埋蔵文化財」でした。これについては、大会直前の11月７日付の北海道新聞に紹介され、ご承知の方もおられるかと思います。紙面では、遺跡の消滅に主眼がおかれ、埋蔵文化財保護を訴える内容でしたが、発表では、消滅する部分の遺跡調査がどのように行なわれ、後世に資料を残したのかという発掘調査の実態とその努力にも言及しました。以下、発表内容の要約を述べさせていただきます。

(1)　テーマのねらい

津軽海峡線は、ＪＲ松前線の湯の里駅付近で地上に現われ、高架橋が大部分を占める新線が木古内駅まで敷設され、そこから在来線が一部単線、一部複線という変則的な状態で函館まで続きます。この津軽海峡線の新線敷設や拡幅工事などのために、埋蔵文化財包蔵地が全体的にあるいは部分的に消滅していきました。このことに注目し、青函トンネルとそれに続く津軽海峡線工事に関連して、遺跡調査がどのように行なわれたのかを調べることにしました。脚光をあびたトンネル工事とは異なり、ほとんどの人々に知られることなく進められた埋蔵文化財調査という側面から、この世紀の大事業を見直してみました。

(2)　遺跡から見た道南の特徴

津軽海峡をはさんで本州と向かい合う道南は、本州ことに東北地方との関連性がもっとも多くみられる地域です。また和人渡来の歴史の古さも、この地域の遺跡を多様にしています。たとえば、図１に示した円筒式文化圏は、北海道南西部地域、ことに函館市サイベ沢遺跡から出土した円筒土器を特徴としますが、これは東北地方北部で栄えた文化です。また図２に示した亀ケ岡文化圏は、木古内町札苅遺跡と青森県西津軽郡亀ケ岡遺跡を含み、道南が東北地方の文化圏に含まれていたことを示しています。

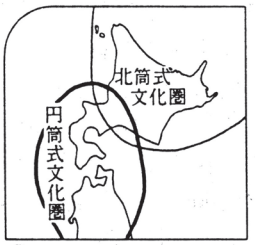


図１縄文前～中期文化圏

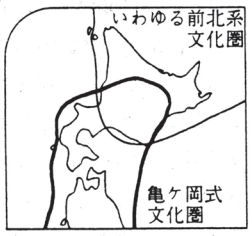


図２縄文晩期文化圏

14～15世紀に、東北地方から本道に渡ってきた武士団が築いた道南の館は、中世の代表的遺跡です。図３に示したように、志苔館から花沢館までの12館はすべて沿岸地域に分布しています。これらは幕末維新の史跡と共に、道南が誇る歴史的遺産です。

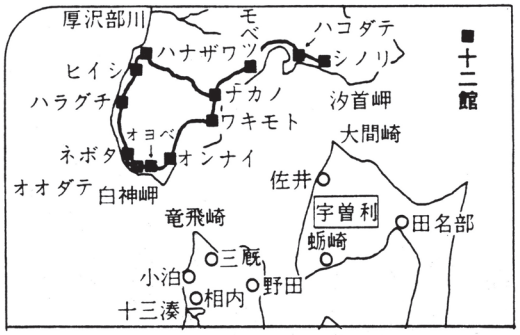
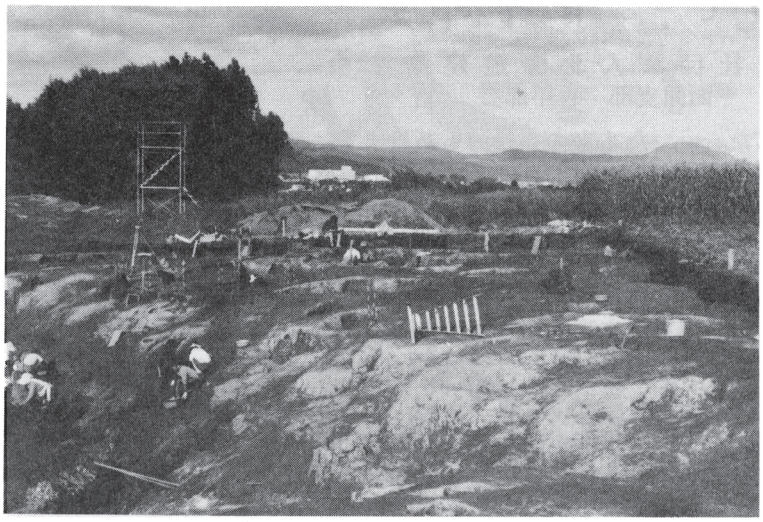


図３　十二館

(3)　開発と文化財保護

縄文時代や中世の遺跡は、ほとんどが海岸線沿いに分布しています。平野部の乏しい道南地方では、海岸線沿いの地域こそが、居住地・道路・鉄道等の集中する地域であります。したがって、国道２２８号線、ＪＲ江差松前線などは、遺跡と無関係ではあり得ない状態になっています。もともと、人間が居住する上で考えられるよい場所とは、水があり、日あたりがよく、風を避けられる所、平地やゆるい傾斜地などであります。縄文時代の人々も現代の人々も、多少の立地条件の相違はあっても、居住条件の基本は共通しております。そのために埋蔵文化財の包蔵地が宅地造成や道路建設、その他の各種の開発事業と対立的な関係になることは、大いにあり得ることであります。効率性や経済性を考えれば遺跡保護の観点が後まわしになることもしばしばあります。ここに問題が生じます。文化とか文化財とかを守り育てていくことは、広い意味で人間が生きていくためであります。宅地や道路をつくるのも同じことです。この対立しがちな両者の接点はどこなのか。これは、個々の条件により大へんに判断の難かしいことであります。埋蔵文化財の場合、工事中に発見した時には工事を中断し、届け出なければなりません。工事の計画変更等ができない場合は、発掘調査をし、その後で工事を再開することになります。発掘調査をする以上、これを単純に遺跡の破壊とは言え



新道４遺跡発掘調査

ません。しかし、調査を終え工事が再開されれば遺跡はなくなるわけですから、結果的には破壊と同じことになります。調査費用も非常に高くつくわけですから、遺跡を避けて開発が行われることが一番よいのです。

(4)　津軽海峡線の場合

図４は、ＪＲ木古内駅からややトンネル側に寄った新設部分の一部です。新道４遺跡と建川遺跡で、埋蔵文化財センターが発掘調査をしました。

図４　新道４、建川遺跡

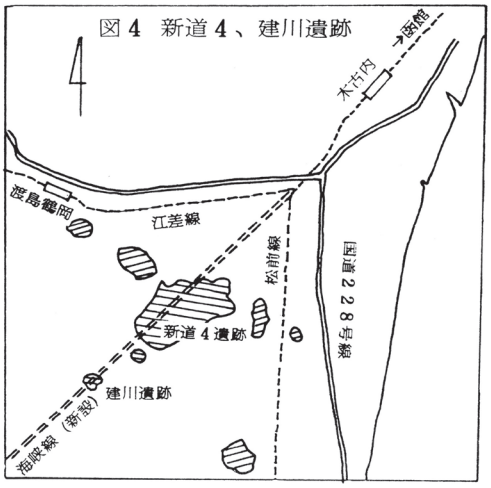


図５　木古内～札苅　遺跡分布

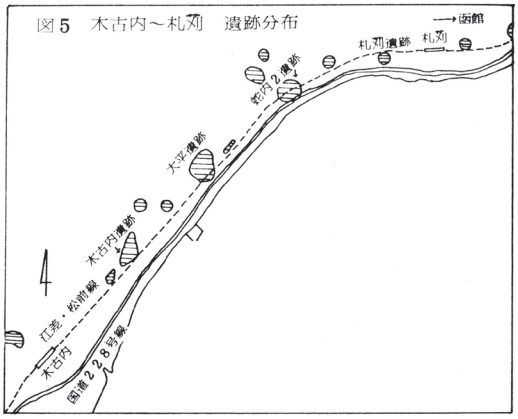
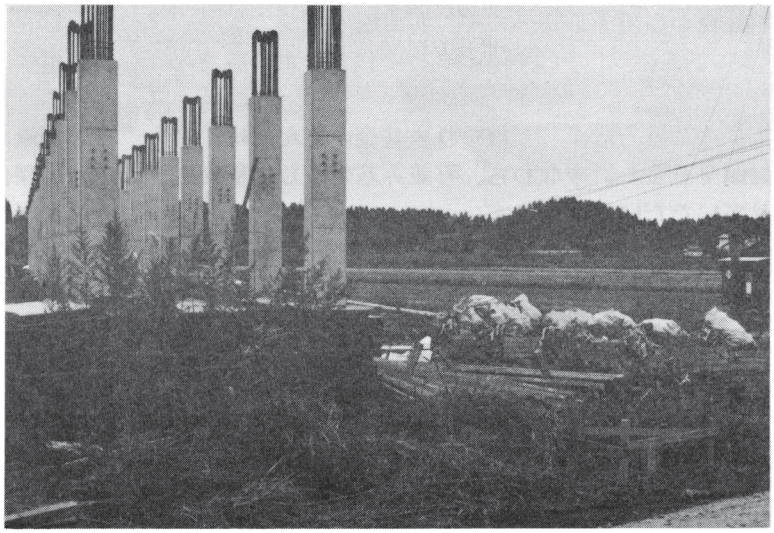


図５は、木古内駅から函館方面に向かって札苅駅までの区間の遺跡分布を示したものです。札苅駅の近くにある札苅遺跡は、線路拡幅のため線路両わきを埋文センターが発掘調査しました。大平遺跡や蛇内２遺跡の場合は、数十年前の、まだ遺跡保護の考えが希薄であった頃の鉄道建設の結果であり、このようなケースは、鉄道に限らず、いたる所にみられます。遺跡の中を鉄道が通っている場合は、拡幅工事には十分に注意する必要があります。このほかに、トンネル工事基地であった福島町の館崎遺跡、砂採取の森越遺跡も発掘調査されました。これらの発掘調査は、当該地域の町教委や北海道埋蔵文化財センターによって行われ、詳細な報告書も発刊されています。青函トンネルに関心があっても、工事の裏面で行なわれたこのような発掘調査には、あまり人々の関心は集まりません。こうした状況下での発掘にかかわった人々の努力に焦点を合わせたのが、今回の発表です。遺跡の保護と開発とは相容れないところがあって、時として、民間の開発事業では、届出も調査もないままに消えていった遺跡も少なくはありません。それだけに、津軽海峡線沿線各町の遺跡調査の苦労と努力に注目すると共に、なぜ遺跡保護が必要なのか、なぜ発掘調査をするのか、鉄道建設という今日的課題とどこで、どういう接点を見つけて解決されたのかを、冷静に判断することが大切であると考えます。

そうしてこそ、遺跡保護の重要性が、現実の問題の中で理解できるのではないかと思います。

（函館北校教諭）



高架橋工事（建川）

もえてるぞ！ 青年部会

社団法人北海道建築士会
函館支部　青年部会　吉　村　冨士夫

戦後、人々の願いは、物質の豊かさを求めました。そして国民一人当りのＧＮＰが、世界トップクラスの仲間入りをし、それが満たされた今、より高度な価値観として、心の豊かさを求める人々が多くなってまいりました。

住まいに対する要求も多様化し、たんなる住まいの確保から、人間的なゆとりのある住生活を求めて来ています。

まちづくりについても、広域化、巨大化、複雑化して、私達の目に見えにくいまちを、もう一度、目に見えるまちにしていきたい、とする人々の願いが、大きくなって来ております。

こうした一人一人の市民が、直接関わって行くまちづくりの実践の中で、単なるボランテア活動ではなく、責任を持って自らの職能として、これを推し進めてゆく役割こそが、地域に携わる我々建築士に、課せられた本来の責務でもあります。

建築士会は、技術面の研修交流については、ある程度進んでおり又会員の親睦も活発に行なわれておりますが、社会との関わりについての情報交流がなされる機会が少なく、今後各種団体、特に歴風会との積極的な交流は、「函館市歴史的景観条例の検討にあたっての提言」がなされた今日、ますます重要になって来ます。

最後になりましたが、建築士会函館支部に昨年５月、青年部会が誕生し、内部活動だけではなく、地域に根を生やした活動（ハリスト正教会修復工事研修会並びに工事現場見学会、函館港祭り１万人パレード参加等）もしております。今後は、従来の価値感にとらわれず、斬新な発想と行動力をもって活動したいと思いますのでよろしくお願い申し上げます。

歴史的風土を守る会の増々の御活躍、御発展をお祈り申し上げます。　（函館工業高校教諭）

事務局だより

１月22日「第10回　函館の町並みを語る新春チャリティー」を五島軒本店で致します。実行委員長は奥山三雄さん、副実行委員長には岡田祝津さんです。ご多忙なお二方がおひきうけくださり感謝いたします。会開催にあたり会員の皆様や多くの市民のご支援をちょうだいしました事をお礼申します。　当日は函館のかけがえなき歴史的文化遺産について語りあい、長年に亘って町並み保存・活性化へ貢献された方々をほめさせていただく場でもあります。

「歴風文化賞」受賞者の方々へ賞状と記念品をおくっています。賞状の文章は前掲の通りです。記念品は芸術性豊かな硝子工芸品です。明治館内ガラス工房。ザ　グラススタヂオ　イン　ハコダテの代表　水口議さんの作品です。

皆様のご協力によって得られま益金の殆んどは「文化財保全基金」、すなわち、町並み基金として積立てさせていただいております。

＝会費納入のお願い＝

61・62年度未納の方、よろしくお願いします。
郵便振替ー函館６３０
又は、拓銀昭和通支店　０２６－２９３－４０７
宛先は、函館の歴史的風土を守る会
住所は、函館市千代台町２０－１８

編集後記

◉歴風会は10年目の新春を迎えました。今年もよろしくお願いします。この10年間、歴風会は一体、何にを主張しどんな具体的行動をしたのか一反省の資としたいと思います。一方、よくぞ今日までの喜びもあります。これは会員の皆様のご協力の賜ものです。今回、10回目のチャリティーを開きます。10年前の第一回は不安要素が多く若し赤字になったらと大半が躊躇し、実行委員長には帰国早々の奥平教授がやっと引き受けてくださるなど大変でした。59年のチャリティーの時「歴風文化賞」を定め相馬株式会社と南北海道自然保護協会を表彰しました。函館の原風景として宣言した場所は「七財橋から見た金森倉庫群」です。その金森倉庫は今、時代の課題を背おい「ヒストリープラザ」へ変ろうとしています。新しいものを創造するエネルギーが原風景のもつ懐かしさ、優しさ、豊かな美しさを一層深化させてほしい。

◉第11回全国町並みゼミが６月４・５・６日、沖縄県竹富島（重伝建）で開かれます東京以西の航空運賃は割引の予定です。詳しくは事務局又は田尻まで
（57－１１７２）

◉61年第３回歴風文化賞をおうけくださった、白翁堂院長佐々木三千夫先生、函館服装学院院長大平富江先生のご逝去に対し、おくればせ乍がら心よりご冥福をお祈り申しあげます。

◉最後になりましたが年末年始のご繁忙の折こころよくご執筆くださいました方々へ感謝の意を表します。（田尻）